

なぜ私ではなく、あなたが？

丸山 勉

[聖書] イザヤ書 52章 13節～53章 12節

見よ、わたしの僕は栄える。はるかに高く上げられ、あがめられる。かつて多くの人をおののかせたあなたの姿のように彼の姿は損なわれ、人とは見えず、もはや人の子の面影はない。それほどに、彼は多くの民を驚かせる。彼を見て、王たちも口を閉ざす。だれも物語らなかつたことを見、一度も聞かされなかつたことを悟つたからだ。(52:13～14)

わたしたちの聞いたことを、誰が信じえようか。主は御腕の力を誰に示されたことがあろうか。乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように、この人は主の前に育つた。見るべき面影はなく、輝かしい風格も、好ましい容姿もない。彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し、わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。彼が担ったのはわたしたちの病、彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに、わたしたちは思っていた。神の手にかかり、打たれたから彼は苦しんでいるのだ、と。(53:1～4)

彼が刺し貫かれたのはわたしたちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのは、わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。わたしたちは羊の群れ。道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて主は彼に負わせられた。苦役を課せられて、かがみ込み、彼は口を開かなかつた。屠り場に引かれる小羊のように毛を切る者の前に物を言わない羊のように彼は口を開かなかつた。捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか。わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり、命ある者の地から断たれたことを。(53:5～8)

彼は不法を働かず、その口に偽りもなかつたのに、その墓は神に逆らう者と共にされ、富める者と共に葬られた。病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ、彼は自らを償いの献げ物とした。彼は、子孫が末永く続くのを見る。主の望まれることは彼の手によって成し遂げられる。彼は自らの苦しみの実りを見、それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人々が正しい者とされるために、彼らの罪を自ら負った。それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし、彼は戦利品としておびたしい人を受ける。彼が自らをなげうち、死んで罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人々の過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのはこの人であった。(53:9～12)

[序] 「苦しみ」は、その人固有のもの

人間は、誰も他の人に代わって、その人生を生きる訳にはいきません。借金のようなものだったら、時に肩代りするということもあり得るでしょうけれども、その人の深い「悲しみ」や「苦しみ」といったものは、たとえどんなに望んだとしても他人が引き受ける訳にはいかないものです。「悲しみ」や「苦しみ・苦難」は、その人に固有のものであります。

聖書は、驚くべきことを語っていると思います。それは、その私たちの「悲しみ」や「苦難」を自分のこととして負って下さる方がいる！と宣言しているのです。そんなことがあり得るのでしょうか。あるとすれば、それはどのようにして可能となっているのでしょうか？

[1]人生の限界状況と「イザヤ書」

精神科医でもあり、また教育者、著述家でもあった神谷美恵子さんは、人間が生きていく中で出会う苦しみ「限界状況」について、5つを挙げました。それは、①「難病にかかること」、②「愛する者の死」、③「人生の夢が崩れること」、④「罪をおかしてしまうこと」、そして⑤「死に直面すること」を挙げています。これは神谷美恵子さん自身の生の経験から生まれた言葉だといってよいと思います。

私たちは人生の途上で、「命とは何なのか」「私が生きることそのものに何の意味があるのか」と、人生が揺さぶられるような経験を、一生の間に何度かするのかもしれない。

今日読んで頂いた「イザヤ書」の預言の言葉は、神様の契約の民であったイスラエルが、バビロン捕囚という亡国の憂き目に遭い、望みを失っている最中に、神様が預言者イザヤに告げた言葉として現わされています。この第二イザヤと呼ばれる無名の預言者が活動していたのは紀元前6世紀後半ではないかと言われています。イスラエルと言うのは、もともと国名ではなく、神様がご自分の契約の民として目を注いで下さった、**信仰共同体**です。その共同体が、自分たちのアイデンティティーである**信仰の危機**に陥っていました。「自分たちは神様から捨てられたのではないか。なぜ、神様はこのような仕打ちを味わわせるのか。いや、そもそも神様などいないのではないか」、そのような思いにとらわれていても不思議はありません。ある意味、この時代イスラエルの民は、先ほどの神谷さんが語った「限界状況」とも言える、深い苦しみ、絶望を経験していたと言っても良いように思います。

[2]「苦難の僕」——徹頭徹尾受け身の生。

しかし、神様は、一度ご自分の民としてお選びになった者たちを捨てられることはないのです。一面、イスラエルの民が「**バビロン捕囚**」という大きな試練にあったのは、彼らがまことの神様に背いた故の審きという側面もあったと思います。しかし、それで神様と神様の民との関係が終わった訳ではありませんでした。イザヤ書というのはメシア預言に満ちている書物です。それは言うまでもありませんが、彼らが考え出した思想ではなく、その彼らの不信仰を超えて、なお神様がご自分の民を憐れむ、**神様の側からの「啓示」**なのです。私は、あなた方を救うメシア・救い主を必ず与える、と神様はおっしゃるのです。たとえば時代は遡りますが、イザヤ書9章も有名です。「ひとりの男の子が与えられる。権威が彼の肩にある。その名は、驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君と唱えられる」と預言されています。ある意味とても健康的な、そして力に満ちたメシアのイメージが語られています。そのようなメシア像が、今日のイザヤ書52章13節のところではまだあるように思います。「見よ、わたしの僕は栄える。はるかに高く上げられ、あがめられる。」と。

しかし、そのあとで預言されている言葉は、全く対照的です。52章14以下をご覧頂くと、全く予期もしないメシア像が描かれています。よく「**苦難のしもべ**」と呼ばれる一連の預言の詩です。口語訳聖書ではこの52:14はこのようになっています。「多くの人が彼に驚いたように——彼の顔立ちはそのなわれて人と異なり、その姿は人の子と異なっていたからである——」。そしてそれに続く53章は、輝かしいメシア像を思い描いていた者にとっては、想像だに出来ない「**苦難のしもべ**」の姿です。皆さんはこの53章のどの言葉に心が捉えられるのでしょうか？

私は今回準備をしていて、気付かされたことがあります。描写に「**受身**」の形が多いのです。例えば3節の「**軽蔑され**」「**見捨てられ**」、4節の「**打たれたから彼は苦しんでいる**」、5節の「**刺し貫かれた**」「**打ち砕かれた**」また、「**受けた懲らしめによって**」「**受けた傷によって**」などです。この「**主のしもべ**」と言われるひとりの人は、**徹頭徹尾**、「**受身**」で生きている存在なのです。

そして、大事なことは、この**苦難のしもべ**の生きざまの背後に、さらに大きな存在がある、ということです。

それは受身形ではなく、非常に強い表現で書かれています。6 節にこうあります。「わたしたちは羊の群れ。道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて主は彼に負わせられた。」ここです。「主は彼に負わせられた。」彼が「軽蔑され」「見捨てられ」「打ち砕かれ」る、というのは、全能なる主なる神様の御旨であった、と言うのです。10 節もご覧下さい。「病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ、彼は自らを償いの献げ物とした。」つまり、この苦難のしもべは、受け身ではあるのですけれども、それは、自分の意思を捨て、それを超えた大いなる意思に従っていった中での「受け身」なのです。ですからこのしもべは、自ら意志的にその道を歩んでいかれます。7 節にはこうあります。「苦役を課せられて、かがみ込み、彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように、毛を切る者の前に物を言わない羊のように彼は口を開かなかった。」—本当に驚くべき主のしもべの姿です。私たちの頭の理解を超えている「苦難のしもべ」の姿です。

[3]神谷美恵子の詩「癩者に」——なぜ私たちではなく、あなたが？

このイザヤ書の中で「彼の姿は損なわれ、人とは見えず、もはや人の子の面影はない。」さらに「彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し、わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。」と表現されている「苦難のしもべ」について、旧約聖書学者のある人々は、ここで言われている「彼」は、あえてその言葉を使わせて頂きますが、旧約聖書時代の、らい病を病んでいる人(現在は「ハンセン氏病」)ではないかと言われます。

彼らは、人との交わりから排除されました。それだけではなく、このような病者は、神の罰を受けた者、何かしらの罪の結果であると捉えられていました。ですから、このような存在がむしろ神様の救いを成し遂げる存在になる、などということは、人間の考えからは決して出てこないことでした。これは正に神様の啓示としての預言だったのです。

このようならいの病人、ハンセン氏病の人に若い時に接して、人生が変えられた方に、先ほど申し上げた神谷恵美子さんがいます。神谷さんは熱心な無教会派の叔父さんやまた新渡戸稲造の影響を受け、既に信仰を抱いていたようです。その神谷さんが1933年(昭和8年)に、ハンセン病療養所の「多磨全生園」に叔父の金沢常雄が話をするときオルガンの伴奏を弾く者として行きました。まだ19才でした。著書『人間を見つめて』の中で当時のことをこのように語っています

「自分と同じ生を享けてこのような病におそわれなくてはならない人びとがあるとは。これはどういうことなのか。どういうことなのか。弾いている賛美歌の音も、叔父が語った聖書の話も、患者さんたちが述べた感話も、何もかも心の耳には達しないほど深いところで、私の存在そのものがゆさぶられた」と。

この少し前に神谷さんは、将来を考えていた男性を病気で天に送るという深い喪失の体験をしています。先ほどの「限界状況」の「愛する者の死」「夢が崩れること」は、自分の身に起こったことだったのです。その中でハンセン氏病の病者と初めて出会いました。

神谷さんは、受け止め切れなかったのだと思います。今まで出会ったことのない存在。顔が崩れ、手足が欠落し、何より親族からも捨てられ、ここで生きている人々。しかし、オルガンの伴奏に声を振り絞って讃美歌を歌っている人々。今この私と同じ場所に生きている人間であって、一体このようなことがあってよいのだろうか？人間とは一体何者なのだろうか？その問いは消えず、ますます強くなり、25才で「病人が私を呼んでいる」との言葉を残し、医学に進むことを決意しました。そして神谷さんは40才台になって、瀬戸内海に浮かぶ「長島愛生園」の精神科医として、そこで働くようになるのです。

その経験の中で神谷さんが作られた詩に、有名な『癩者に』という詩があります。
「光うしないたる眼うつろに 肢うしないたる体担われて 診察台に、どさりと載せられたる癩者よ、私はあなたの前に首を垂れる。あなたは黙っている。かすかに微笑んでさえる。ああ、しかし、その沈黙は、

微笑みは 長い戦の後に勝ち得られたるものだ…。

何故私たちがなくてあなたが？ あなたは代って下さったのだ。許して下さい、癩者よ。浅く、かろく、生の海の面に浮かび漂うて、そこはかたなく、神だの靈魂だのと きこえよき言葉をあやつる私たちを。

かく心に叫びて首たるとれば、あなたはただ黙っている。そして傷ましくも歪められたる顔に、かすかなる微笑みさえ浮かべている。(『うつわの歌』より)

「何故私たちがなくてあなたが？ あなたは代って下さったのだ」と神谷美恵子は言いました。この言葉は、聞き方によっては、随分傍観的な響きにも感じるかも知れません。しかし、そうではないと思います。神谷さんはきっと、この病者を見つめれば見つめるほど、触れれば触れるほど、自分という存在と無縁ではない、と思ったのではないかと思います。そして神谷さんは、この病者と出会う中で、自分自身の中にある「弱さ」や「罪」を直視せざるを得なかったのではないのでしょうか。それが「許して下さい、癩者よ。浅く、かろく、生の海の面に浮かび漂うて、そこはかたなく、神だの靈魂だのと きこえよき言葉をあやつる私たちを」という言葉になったのではないのでしょうか？神谷さんは祈ったのです。「ゆるしてください、私を」と。

[4]喜ばしい交換

「何故私たちがなくてあなたが？ あなたは代って下さったのだ」という言葉は、よくよく味わってみたい言葉だと思います。例えばへんな言い方ですが、誰か重い病気を抱えている人に向かって「あなたは私に代わって下さった」とはとても言えません。これは、人間に向かっては決して言えないのです。もし言えるとしたら、自分の罪を全部その方が引き受けて下さる方、そしてそれ故に苦しむことを甘受される方がいる時ではないのでしょうか。繰り返しますが、それは人間には出来ません。神谷さんはこの病人の向こう側に、聖なる存在を仰いでいるように思います。

先ほど私はイザヤ書 53 章の「主のしもべ」について「自分の意思を捨て、それを超えた大いなる意思に従っていった存在」ということを申しました。

私たちはその方を知らされています。主イエス・キリストです！

例えばマタイによる福音書を思い起こしてください。有名な山上の説教が 5 章から 7 章まで記されていますが、イエス様はその山を降って、まず誰に出会われたのか。「思い皮膚病の人」です。当時のらい病人です。イエス様は彼に手を差し延ばされ、彼に触れたのです。そうすると彼の病はたちどころに清くなったのです。マタイ福音書が記す、主がなさった最初の奇蹟です。他の福音書でもそうなのです。主の公の生涯のわざで、最初になさったことは病人たちの癒しです。それはイエス様を信じれば即刻病気が癒されますよ、というようなことではありません。この意味について、マタイは 8 章で明確にこのように語っています。17 節。「それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。——彼は私たちの患いを負い、私たちの病を担った——」。イザヤ書 53:4 からの引用です。主がなさった「癒し」の本質は、病の治癒と言うより、その病める者の患いを、もっと言えばその人自身を「負う」ということではないのでしょうか。

私は先週一緒に聞いたイザヤ書の聖句を思い起こしました。46 章 3 節以下です。「わたしに聞け、ヤコブの家よ。イスラエルの家の残りの者よ、共に。あなたたちは生まれた時から負われ、胎を出た時から担われてきた。同じように、わたしはあなたたちの老いる日まで、白髪になるまで、背負って行こう。わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す。」

これはロマ書の 8 章全部と並んで、私が臨終で誰かに朗読してもらいたい愛唱聖句です。神様が最後の最後まで、この私の命の造り手として、責任を持って背負って下さるのだ！たとえどんなに神様の顔に泥を塗るようなことをしていても、憐れんで下さるのだ、と。

改革者マルチン・ルターは、イエス・キリストは私たちが背負うところではない、彼の命と私の命を交換して下さったのだ！と言いました。『キリスト者の自由』の中に「喜ばしき交換」という項目があります。その中で、イエスさまは自らの豊かさと私たちの貧しさを、自らの清さと私たちの汚れを、自らの義と私たちの罪とを交換して下さったのだと言っています。しかし、これはルターが考え出したことではありません。イザヤ書 53 章に記された神様の計り知れないご計画です。

「彼が担ったのはわたしたちの病、彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに、わたしたちは思っていた、神の手にかかり、打たれたから、彼は苦しんでいるのだ、と。彼が刺し貫かれたのは、わたしたちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのは、わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によってわたしたちは癒された」(4～5 節)。

驚きましよう！あり得ないことを神様はして下さいました。イスラエルの民だけではなく、そのイスラエルのつまずきをもお用いになって、全世界の救い主を私たちに与える、というみわざをなして下さいました！それは、私たちが罪の中に滅びることを望まずに、ご自分の独り子に、そのすべての罪を十字架の上で負わせるということでした。「彼が自らをなげうち、死んで罪人のひとりに数えられた」とある通りです。主イエスご自身が自らをなげうち、父なる神様のそのみ思いを選び取って黙々とゴルゴタの道を歩まれたのです。私たち一人ひとりを愛したからです。私たちの悲しみ、苦悩をご自分のこととして引き受けられたからです。このようなお方は他にはおりません。

[結]感謝と畏れ、悔い改めをもって

応答讃美としてご一緒に歌う讃美歌 221 番『血しおしたたる』、私は特にこの第 2 節が好きです。「主の苦しみはわがためなり われは死ぬべき罪びとなり かかるわが身に代わりましし 主のみこころはいとかしこし」。

来週からこのお方の到来を待ち望むアドベントです。心からの感謝、また畏れと悔い改めを持って、アーメン！と主を讃えたいと思います。

祈ります。

主イエス・キリストの父なる神様、御名を讃えます。

イザヤ書 53 章の言葉、それは私たち一人のための救いの言葉です。あまりに深く、大きく、私たちはこれを受け止めることが出来ない思いが致します。しかし、どうぞ今、これが私のための主の言葉であり、主ご自身の歩みであったと信じ、感謝する信仰を与えて下さい。主は今も生きておられ、私たちの生涯の最後の日まで、いえ、死んだ後も、私たちの命を愛し、責任を持って持ち運んで下さるお方であることを信じさせてください。この救いは全ての人の救いです。私たちの教会を、また私たちをも、あなたの器としてお用い下さい。

新しい思いを抱いて、アドベントを心から待ち望むことが出来ますように。この世界と日本をどうぞ憐れんで下さい。

救い主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。

アーメン。